

夏季のねぎの管理について

1 土寄せ

ねぎの生育適温は20℃前後で、高温は非常に大きなストレスになります。ねぎが弱っているタイミングでの土寄せは、病気を誘発する可能性が高くなるため、避けてください。

夏ねぎや9月に収穫するねぎを栽培している場合は、暑さのピークを迎える前までに、できるだけ土寄せを行っておきます。夏季に土寄せをせざるを得ない場合は、①朝夕の涼しい時間帯に作業を行う。

2 排水対策

- ② 首元まで埋めない。
- ③ 一気に土寄せしない。
- ④ 左右両側の根が一気に断根されるのを防ぐために、通路を一つ飛ばしで土寄せする等、注意して作業をしてください。

ほ場が過湿になったり滞水したりすると、株が弱り、病害虫等の被害も発生しやすくなります。雨水の流入を防止し、うねの水が速やかにほ場外へ排水できるように、ほ場周囲に明きよを掘ります。

3 注意したい病害虫

生育不良がみられる場合には、株を抜いて観察し、今後の対策を考えるためにも原因の把握につとめましょう。また、生育に問題が見られなくても、土寄せ、台風、ゲリラ豪雨、強風等、ねぎが傷つく状況がある場合には、予防的に防除を行います。

(1) 軟腐病

地際部付近が水浸状にしっかりと腐り、特有の悪臭を放つのが特徴です。根の周辺や葉の上で増殖した病原菌が、害虫の食害痕や風雨、管理作業でできた傷口、気孔からの侵入により、植物体内で増殖し発病します。

(2) 白絹病

地際部に白いカビの菌糸と茶色の粟粒のような菌核をつくるのが特徴です。未熟な有機物を施用すると発病が助長されます。

(3) ネグミ類

根や地中の茎盤部が食べられてしまうため、被害を受けた株は簡単に引き抜くことができます。被害部には0.7mmほどの小さなダニがたくさんみられます。萎凋病や軟腐病などの土壌病害と併発することもあります。

(4) ネギネクロバネキノコバエ

幼虫が集団で地中の茎盤部を食

害します。秋になり涼しくなるとと虫が増えてくるため被害が本格化します。また、土寄せ作業に伴って防除薬剤が虫のいる部位に届きにくくなるので、早目に対処する必要があります。発生地域が拡大しているため注意してください。

秋冬ブロッコリー

病害対策について

秋冬ブロッコリーは作型が多く、栽培期間が高温期から低温期にかかり、気候の影響を受けやすい品目です。そのため、病害の発生も多く、症状も様々で、対策がとて難しくなります。病徴や対策について、しっかりと理解して適切な防除を心掛けましょう。

1 注意したい病害

(1) 花蕾腐敗症

花蕾腐敗症は、細菌が病原となるものです。花蕾が腐り、腐敗臭がするのが特徴です(写真1)。高温期にまとまった降雨があると発生しやすくなります。前年に発病が見られたほ場の場合、再び被害が出る可能性が高くなります。また、症状が悪化すると隣接株も被害が出る可能性があるため、注意しましょう。

● 対策

- ① 被害があつたほ場では作らない。
- ② ほ場の排水性の確認と改善。
- ③ 銅剤による早期予防。

※銅剤は、成分が触れたところのみ効果が出るものがほとんどです。散布の際には、植物体に全体にかかるように意識しましょう。

(2) 黒すす病

黒すす病は、糸状菌(カビ)が原因になる病気です。また25℃前後で発生しやすくなります。主な症状として、丸型の斑点が生じ(写真2)、下葉から上位葉、花蕾上位葉、隣接株にも広がります。また、葉表に病斑が見えなくても、裏に病斑が出ている場合があるので、気づかないうちに感染が拡大する可能性があります。

● 対策

- ① 育苗時の防除(菌をほ場に持ち込まない)。
- ② 発病前からの予防的散布・早期防除



花蕾腐敗症
(写真1)



黒すす病
(写真2)